

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	言語コミュニケーション文化研究科
大項目	4 教育研究組織 (研究科)
中項目	
小項目	4.0.1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
要素	教育研究組織の編制原理 理念・目的との適合性 学術の進展や社会の要請との適合性 (KG1)研究活動の状況
小項目	4.0.2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 研究科の教育研究内容と社会のニーズとの関係について定期的に検証する体制を作る。	→検証体制の確立・実施。	A	A	A	A	A
2. 教員の研究成果を社会に公表し、活動内容の認知を推進する。	→教員の研究成果公表。紀要への論文執筆者数。学会発表数。シンポジウム、講演会の開催数。	B	B	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 月1回の研究科執行部会、年6回程度開催しているカリキュラム委員会およびその委員会のもとに組織されたワーキンググループにおいて、研究科のプログラムおよび開講科目が社会のニーズに対応しているか検討を実施してきた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 言語教育学領域および言語文化学領域において開講科目の再編を実施し、さらに、2015年度より言語文化学領域に多言語多文化学際プログラムを新設することが決定した。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後も同様の体制で検証を実施していく。	☆
		その他	☆

目標2	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究科の教員は各学部および教職教育研究センターに属する外国語担当教員計41名から成り、4つの研究領域(言語科学、言語文化学、言語教育学、日本語教育学)のうちの1～3つの領域に属し、極めて活発な研究活動を行ってきた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 教員の研究成果は研究業績データベースで公表している。当該期間における紀要への論文執筆者数は延べ40名で、シンポジウムおよび講演会は12回実施した。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 教員の研究成果をもっと積極的に公表していき、入試広報とリンクさせていきたい。	☆
		その他	☆
備考			☆